

ある疑念

酒井 敏

大分古い話になるが、卒論のことで西脇順三郎先生にお伺いを立てに行ったとき、「何をやりたいのか」ときかれて「ワイルドです」と答えると、「あれは、小説や芝居は面白くないが、批評がいい」といわれた。そのひとことで、私のテーマは決まってしまった。なぜワイルドの小説や芝居は面白くない、批評がいいのか、そのとき聞きそびれて以来、私の心の底には何かひっかかるものがあった。

もう一つそのときの記憶で、先生からの「今何をよんでいる」との質問に、『獄中記』をあげて「彼のモラリスト的な面を調べてみたいと思っています」といった、すると先生は急にこわい顔になり、「彼は男色家だったのです」といった切り、口をつぐんでしまわれたことがある。私は、フランスの *Moraliste* の意味で使ったつもりだったが、先生がそれをどうとられたのかは、も早や問い直す術もなく、未だに分らない。

だが、私のワイルドへの探究は、この二つの疑念から始まって、今なおそれに支えられて続けている。もっとも最初のそれは、近頃やっとなげかけて、『ドリアン・グレイの肖像』、『サロメ』、そして一連の風習喜劇に背をむける気は毛頭ないが、文人ワイルドの本領を何よりも批評家としてみる立場に、私は益々かたむくようになっている。

第二の疑念は、しかし、まだ晴れない。ワイルドに冠せられる、美の使徒、アカダン、ダンディ、等々の呼び名が、いずれも私にはびんとこないまま、先生のことばを反芻していると、あるときふと「ワイルドは、十九世紀イギリスで、罪の意識を持った数少ない文人ではなかったか」と思い付いた。

その理由は、うまく説明できない、又罪の意識というのが正しいのかも分らない。ただ、彼が得意のウィットと逆説を駆使して、華麗なポーズで装おえば装おうほど、その底に悲しいまでに純粋な本音が、垣間みえてくると感じるの、一体どうしてなのか。

あの平明で暖かい童話の世界と『サロメ』の血の匂いのする悪の世界を、又風習喜劇の才気にあふれたダンディズムと『獄中記』の苦渋にみちた世界とを、つないでいるものは果たして何なのか。

仮面に真実を語らせるアイロニストの本音に迫るには、そのギャップを埋めるために、たとえ仮説でもよいから、罪の意識といったものを想定してかかる以外に、手はないのではあるまいか。
(東京家政学院大学教授)

ガク無き者のモノローグ

樋口 陽子

「人間は罪と呼ばれる疎外感と喪失感なしには神の心に到達することはできない」というカトリック精神に本来備わっている真実がワイルドにある、とジョイスは書いた。創世記の神話を異文化の過去の精神的出来事として眺め、原罪も樂園追放も女性の従属的状况を正当化してきたと思う私は、原罪意識を抱くことも、樂園追放に由来する疎外感や喪失感を感じずともない。ジョイスのこの文は、理解できないまま長らく心から離れないでいる。しかしキリスト教的「疎外感」と「喪失感」ではなく、現実の「疎外」と「喪失」

と考えると、ワイルドの心情が理解できそうだ。入獄は、実社会からの、また彼の愛する者達からの疎外であったし、世俗の名声や金銭的収入のような有形無形の財産を剥奪したのみならず、法律上子供達を失い、母と死別し、妻と生別し、自らの健康も害うというヨブにも比すべき喪失も課した。その中で『獄中記』を認める。「もし出獄後、友人が悲しみを抱きながら、それをわたしにわかちあわせてくれなかったら、わたしはとてつらい思いをするだろう。…わたしは悲しみをわかちあう権利があるのだ、そしてこの世のうるわしさを眺め、その悲しみをわかちあい、これら両者の驚異を悟ることのできるひとは、もろもろの聖なるものにじかに触れたわけであり、人間として達しうるかぎり神の神秘に近づきえたのである」と。

『獄中記』はボジー宛の私信であるゆえに本来ダイアログである。しかし同時に自身の心の中でのモノローグであり、祈りであろう。読者は自分に宛てられたダイアログとして読むかもしれないし、ワイルドに同化し、モノローグとして彼の心を追体験してもよい。過去にこの世の loveliness を享受したワイルドは、今は sorrow の「深き底」に沈み、神を求め、神に近づけると信じているようである。ところで、ジョイスの解説は宗教的次元のものであろう。御教示頂ければ幸いである。
(学習院女子高等科教諭)

試写室からのモノローグ

岩崎 光洋

3月末からパルコ西武劇場で公開の『善悪の彼岸』の試写会。19世紀から20世紀にかけ、自由奔放に生きた〈世紀の才女〉ルー・サロメとフリードリッヒ・ニーチェ、パウル・レーの“聖三身一体”の共同生活（実際には実現しなかった。）期を軸に、ニーチェの没年1900年近くまでを描いた問題作だけに、試写室にはドイツ文学・哲学の先生方の姿が多数見られる。私がこの作品を観に来た理由は、監督が「愛の嵐」のリリアーナ・カヴァーニであり、撮影が「地獄に堕ちた勇者ども」のアルマンド・ナンヌツツであり、衣裳がヴィスコンティの「ベニスに死す」「家族の肖像」のピエロ・トージであり、出演者がドミニク・サンダ（サロメ）、エルランド・ヨセフソン（ニーチェ、まさに名優の名に値する名演技）、「ナザレのイエス」のロバート・パウエル（パウル・レー）であったにすぎません。

「1899年が暮れようとしているのよ。ねえ、19世紀が終るの。誰もあなたに言わなかったのかしら？ 私達の時代が近づいているのよ、フリッツ。」と痴呆状態のニーチェに語るサロメの言葉で1時間56分のこの作品の上映は終る。何よりも、この映画が哲学者ニーチェ先生の伝記ではなかったことに感謝。

さらに、1875年にワイルドが訪れたヴェニス、そして77年に熱望しながらも果たせなかったローマの当時の風雲開きを再現してくれた映像に深く感謝。（ちなみに、サロメとニーチェがローマで知り合ったのは82年）

今は言葉には表現出来ないながらも、この作品の映像には間違いなく、世紀末のムードが漂い、それを実感出来たことに大感謝。

(青山学院大学(非)講師)